

# 21世紀フォーラム

No.106



財団法人政策科学研究所

# 持続可能な環境と経済を目指す ある試み

——ダージリン、マカイバリ茶園のプロジェクト

石井博子(南マカイバリジャパン専務取締役)



マカイバリ茶園4代目茶園主スワラージ・クマール・バナジー  
(写真提供：Jean-Luc Luysen)

## はじめに

——世界からの熱い視線を浴びて

悠久の歴史の中で、哲学や文化、宗教を世界に発信してきたインド。多言語・多民族・多文化が混在する巨大な国インドは今、その歴史の一端で急激な変化を遂げている。

著しい伸びを見せる経済成長、物質的に豊かになる人々の生活。世界の注目が、インドのめざましい変化に向けられている一方で、山岳部ダージリンにおいて、その取り組みが世界中から注目を浴びている一人のインド人経営者がいる。

持続可能な経営とは何なのか。「人」「環境」「経営」をキーワードに、ダージリン・マカイバリ茶園が実践する、ホリステイックな視点に立った茶園経営を紹介していく。

## ヒマラヤ山麓、ダージリンの歴史と茶園

「雷電の土地」ダージリンは、チベット語のドルジェリン (Dorje Ling) に由来する。ヒマラヤの山々を見渡すダージリンは現在、インド西ベンガル州に属すが、インドが英国支配下にあった十九世紀に、英国人が療養地として開発を進めた。十九世紀中頃から、英国人によって栽培されたダージリン紅茶は、今日に至るまで世界の銘茶と呼ばれるほど有名になった。

ダージリンは、ネパールと国境を接し、歴史的背景から住民の約八〇%がネパールからの移民者や、ゴルカ兵の末裔である。現在でもゴルカランド独立に向けての動きは絶えず、そのため、ダージリン地区の行政の一部は、西ベンガル州から行政権限を委譲される形で、

カ丘陵評議会 (Darjeeling Gorkha Hill Council) によって行われている。ダージリンには約八十の茶園があるが、現在最も深刻な問題となっているのが、労使問題である。

一般的に多くの茶園では、茶摘みや工場などの現場労働にネパール系の人々が従事し、管理職にネパール系や山岳部出身ではない人々が従事する構図ができあがっている。

茶園のオーナーという職業は、インドでは身分が高い。彼らは山岳部の茶園では生活せず、コルカタやその他の大都市に居を構える。従って、茶園の経営は、雇われマネージャーによって指揮されるのである。雇われマネージャーとして派遣された者のほとんどは、茶園の内部出身者ではなく、外部から派遣された大都市出身者であることが多い。

通常、雇われマネージャーの任期は



茶摘み女性 (写真提供: Jean-Luc Luysen)

マカイバリ茶園は一八四〇年代にイギリス人・サムラーによって紅茶の苗木が植林された、ダージリン地方で長い歴史を持つ茶園の一つである。一八五六年、サムラーは商業目的としてダージリンで紅茶農園を開始し、一八五七年にG・C・バナジーに営業権を譲渡、同年に製茶工場を設立し、一八五九年にはマカイバリ茶園 (Makibari Tea Estates) の名を正式登録した。以後、現四代目茶園主スワラージ・クマール・バナジー (以下、バナジー) に至る約五十年間、ベンガル人であるバナジー家が茶園の人々と共に生活し、茶園経営を行っていた。

### マカイバリ茶園 —茶園主バナジーとその先駆的哲学

数年ほどである。限られた短い時間に、雇われマネージャーは結果を出そうと躍起になり、茶園労働者たちの労働環境や生活改善などのケアまで目が行き届かないことが多い。また、茶園の外部出身者である雇われマネージャーにとって、茶園労働者の多くを抱えるゴルカのアイデンティティを理解することは難しく、そのことが茶園労働者との心理的溝を深めることもある。

「マカイ」とはチベット語で「トウモロコシ」、「バリ」とは「肥沃な土地」の意味で、マカイバリ茶園に紅茶が植えられる前、その地は肥沃なトウモロコシ畑だった。

インド西ベンガル州ダージリン地方に設立されたマカイバリ茶園は、良質な紅茶園が多数あるカーシオン地区 (Kurseong) に位置し、総敷地面積が六百七十ヘクタール、東京ドームの約百四十五倍である。その三分の一 (二百七十ヘクタール) が茶畑に、残りの三分の二 (四百ヘクタール) が原生林のまま残され、無数の野生動物が生息している。

標高約千三百メートルに位置するマカイバリ茶園は四つの山にまたがり、七つの村からなっている。茶園の敷地内には約六百八十人のコミュニティ (バナジーは「従業員」と呼ばず「コミュニティ」と呼ぶ。以下、コミュニティ) と、その家族約千七百人が暮らしている。

現在のマカイバリ茶園を率いるバナジーは、茶園で生まれ育ち、英国の大学を卒業後、エンジニアになることを目指した。しかし茶園に帰省中、森の中で落馬し、茶園の人々に助けられた。彼らの心の温かさに、自らの原点が茶園にあることに気がついた彼は、家業の茶園を継ぐことを決意する。バナジーが茶園に戻ってきた七〇年代、ダージリンの茶畑は農業や化学肥

料の使い過ぎで痩せていた。そのことに非常に衝撃を受けた彼は、独学で農業を学んだ。ルドルフ・シュタイナー (二八六一—一九二五) のバイオダイナミック農法、福岡正信 (一九二二—一九九一—一九四八) の哲学は、バナジーのその後の茶園経営に強く影響を与えている。

バナジーについて特筆すべき点は、農業において先駆的な哲学を持つだけでなく、茶園経営においても異色の茶園主であることである。

既述したが、一般的にインドにおける茶園主は身分が高く、山岳部の茶園では生活をしない。実質的茶園経営は雇われマネージャーに任せている。約八十あるダージリン地方の茶園で、茶園のオーナー自らが茶園に住み、茶栽培の指導に当たっているのは、マカイバリ茶園主バナジーだけである。

創業当時からバナジー家が茶園に住み、コミュニティと共に茶栽培に取り組んできた姿勢は、茶園内で強い支持を得ていると共に、そのことは約五十年におよぶ茶園史の中で大きなストライキを経験することなく経営を続けることができた要因と言えよう。

バナジーは毎日七時間かけて、茶畑を歩く。上や茶木の様子を観察するだけでなく、茶畑で働いている人たちとコミュニケーションをはかるためでもある。バナジーは茶園で働く約六百八



パーマカルチャー：さまざまな植物が共生する

十人の名前をすべて覚えていた。そのような気さくな彼の人は、コミュニティの人々の身の上相談にのるほどである。昼食まで茶畑を歩き、午後から身の上相談にのり、夕方に一日の成果報告のミーティングを開くのが彼の日課である。

紅茶に関わる人、動植物、自然、それらすべてが関連し、調和を保ち、良い状態である時に、すばらしい紅茶が育つ、とバナジューは考える。

### 持続可能な経営と農法

バナジューの理想は、「自然との調和」の中で茶栽培を行うことである。バナジューは「ホリスティック (Holistic)」という言葉をよく使う。バナジューの指すホリスティックとは、全体的な繋がりを意味する。マカイバリ茶園に置き換えれば、茶を含む植物・動物・空気・水・人間、それぞれがホリスティックの一要素であり、それぞれに相互関係にある。そしてそれらがお互いに調和のとれた状態であることが理想的であり、ホリスティックな視点に立った持続可能な茶園なのである。

約六百ヘクタールあるマカイバリ茶園の敷地は、三分の一だけが茶畑として利用されている。一般的にダージリンの茶園は、活用できる敷地はなるべく茶畑にあてられる。しかしマカイバリ茶園はあえて三分の二を原生林のま

を残す。自然のサイクルを乱さず、調和のとれた中で良質な紅茶を生産するために必要な比率は、マカイバリ茶園では一対二なのである。

ホリスティックな視点に立った茶園経営に農業や化学肥料は必要ない。農作物を育む土地は次世代にわたるまで持続可能な土地でなければならぬ。そのため農薬、殺虫剤、除草剤を使わず、牛糞、油かす、枯葉などの有機肥料や、天然のハーブを用いる。マカイバリ茶園ではすべての茶畑において三十年以上全く農薬が使われていない。

### バイオダイナミック農法

バナジューに最も強い影響を与えたのがバイオダイナミック農法である。バイオダイナミック農法とは、オーストリアの人智学者ルドルフ・シュタイナーによって提唱された農法で、有機栽培を更にすすめた農法である。具体的には、①天体の動きを利用する、②調合剤を用いる、③動物との共生である。

私たち人間は日常生活において月の満ち欠けに影響を受けている。植物においてもそれは同じであり、天然のハーブなどから作られた九種類の調合剤を用いることで、天体からのエネルギーをより受けやすい土作りをするのである。

またバナジューは、上記に加え、九種類の調合剤がそれぞれ人間の臓器の役割を果たすと考える。心臓の役割、消

化の役割、分泌の役割など、人間の体内で生命維持に必要な主な臓器の役割(調合剤)が土に撒かれることにより、土が人間の体のように働き始め、生命力豊かな土に育つと考えるのである。

バイオダイナミック農法によって育てられた植物は、他の農法で作られた植物に比べ、生命力あふれ、それを口にした人間に活力を与えてくれると言われている。

マカイバリ茶園ではバナジューによって一九八八年からすべての茶畑においてバイオダイナミック農法が実践されている。

一九九三年、マカイバリ茶園は、バイオダイナミック農法の認定団体である英国のDemeter (デメター) より、世界の紅茶農園で第一号のバイオダイナミック農法の認定を受けた。以後、毎年更新されている。

### パーマカルチャー

パーマカルチャーとは、単一作物を栽培するモノカルチャーに対して使われる言葉である。

マカイバリ茶園では多種多様な植物の中で紅茶栽培を行うパーマカルチャーを、一九七五年より実践している。六層からなるパーマカルチャーを行うことで、原生林の中で動物が野生のまま生息できるだけでなく、自然の生態系を崩すことなく紅茶栽培を行うことができる。またこのことは、突如として起こる自然災害に対しても、その害



動物との共生：マカイバリ茶園で生息する鳥たち

を最小限に食い止めることができるのである。

第一層…原生林

第二層…マカイバリ茶園に常植しているマメ科で日陰を作る木（ネムノキなど）

第三層…一時的に植えるマメ科で日陰を作る木（インデイゴなど）

第四層…マメ科の果実の木（ニーム、ガテマラグラス、ネビアグラスなど）

第五層…茶の木

第六層…様々な種類の雑草、ツル植物、土の下の植物

パーマカルチャーは、ホリスティックな視点に立った紅茶栽培を行うマカイバリ茶園の根本的理念とも言える。

#### マルチング

マルチングとは、ガテマラグラスなどの草木を土表に敷き詰める農法である。この農法は降水による衝撃を緩和し、土壌の流出を防ぐと共に、雑草の成長を制御する。早魃時期には土壌の水分を保湿し、やがてガテマラグラスが枯れると土壌の表面に還り肥沃な上となる。マカイバリ茶園では、一九四五年より三代目茶園主バナジーがマルチングを導入した。

#### 動物との共生

敷地の三分の二（約六百ヘクタール）が原生林のまま残されているマカイバリ茶園では、無数の動物が野生のまま暮らしている。WWF（世界自然保護基金）に登録されている二頭のベンガ

ルトラをはじめ、十八頭のヒョウ、シカ、ウサギ、サル、ガチョウ、三百種類以上の野鳥、千種類以上の蝶など、まさに自然のパラダイスである。

マカイバリ茶園ではレンジャー部隊を作り、原生林を毎日観察し、週に一度行われるミーティングで動物たちの様子が報告される。自然と人間が共生するためには、生態系の小さな異変にいち早く気づき、対処することが必要なのである。

#### 「女性の力」重視とフェアトレード

植物や動物と共に茶園の中で重要な役割を担うのがコミュニティである。

コミュニティが健康で幸せな生活を送るために、バナジーは「女性の参加」に焦点をあて、先駆的な取り組みを導入した。

バナジーは茶園の経営に女性の力が必要だと考える。何故ならば、バナジーは常に茶園の人々とともに働き、彼らとコミュニティを築くことに努め、女性がいかに上手く、社会のミニチュア版である「家庭」をマネージし、コントロールしているのかを知っているからである。

「女性の経営参加」を視野に入れ、フェアトレードに加盟したこと、そして女性初の監督者を採用したことは、その後のマカイバリ茶園におけるコミュニ

ニティーの生活を一変させただけでなく、マカイバリ茶園の経営自体も充実したものと変化させていった。

#### フェアトレードに参加

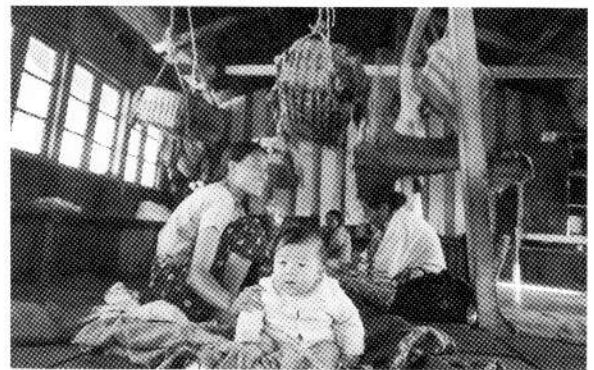
一九九四年、マカイバリ茶園はドイツ・ボンに本部を置く「TransFair International（現Fairtrade Labeling Organizations International）」以下、FLO）に生産者として加盟した。そしてこれを機に、マカイバリ茶園の女性はいよいよインシアティブをとるようになり、茶園の社会福祉プロジェクトが本格的に始動していった。

フェアトレードは、一九六〇年代に、経済的、社会的に立場の弱い生産者に対して通常の国際市場価格よりも高い価格で継続的に取引し、途上国の自立を促すという、人道的側面が強い社会運動としてヨーロッパで始まった。当初、草の根運動だった活動は、二〇〇六年十月現在FLOの下、二十カ国の国レベル組織が加盟し、南の五十カ国の六百三十七生産者団体、及び北の六百五十四の関連企業と連帯して世界的に活動を広げている。

フェアトレードは、環境に優しい農業や、よりよい運営などに取り組む生産者に対して、代金の前払いと、長期の取引を保証している。また、生産者は売り上げの一部（奨励金）を直接受け取ることができ、その資金が環境保全や生活向上の支援に運用される仕組みになっている。



医療費もフェアトレードの奨励金でまかなわれる  
(写真提供: Jean-Luc Luysen)



女性の声から生まれた託児所  
(写真提供: Jean-Luc Luysen)

### マカイバリ茶園におけるフェアトレード活動

マカイバリ茶園の紅茶は日本をはじめ、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスを中心に、世界各国で販売されている。

売り上げの一部として茶園に戻ってくる奨励金は、コミュニティの中から選挙で選ばれたメンバーで運営される「ジョイント・ボディー」の口座に直接入金され、資金の使い道はジョイント・ボディーが会議によって決める。

ジョイント・ボディーは十人で構成されており、その内七人が女性である。奨励金は、コミュニティの社会福祉プロジェクトにあてられるが、その細部には女性であり、母親である彼女たちの意見が実に良く反映されている。

### 無料託児所

コミュニティの多くの女性は、茶摘みの仕事に従事している。母親が安心して茶摘みに専念できるように、と茶畑のそばには託児所が建てられた。無料で利用できるこの託児所システムは、茶園で働く女性の声から生まれた。

### 充実した教育

子どもの教育は最も大切である。茶園の中に二つある政府系の小学校は、フェアトレードによる奨励金で建てられた。トイレも完備されている。インドの政府系の小学校にはトイレが無い学校が少なくない。教育費と教材費も奨励金でまかなわれる。

マカイバリ茶園における五年間の初

等教育終了率は一〇〇%であり、インド全体が四一・八%（二〇〇三〜四年）であるのに比べると画期的な数値である。

その他、子どもたちが将来の選択肢を広げられるように、コンピュータ教室も開いた。

### 無償での医療

奨励金で建てられた茶園内の診療所では、無料で診察を受けることができる。必要な薬や、子どもたちの予防接種などもすべて無料である。また、緊急で病院に行く際には、奨励金で購入した救急車を利用できる。

茶園内には動物診療所もあり、茶園内に住む動物は、無料で診察、予防接種、薬の処方を受けられる。

### 100%の回収率を誇る貸付金制度

マカイバリ茶園では、新しい事業を起す人を積極的に支援している。フェアトレードによる奨励金は、無担保、無利子、または低利子で貸付けられ、事業を始める際の軍資金として活用される。

マカイバリ茶園では、牛が大きな役割を果たしている。牛糞はバイオガスや堆肥に活用され、ミルクは高値で売ることができ、また、余った牛糞はマカイバリ茶園が彼らから購入する。このように、生活のためだけでなく副収入を得る手段となる牛を購入する際、貸付金制度を利用することができる。

その他、茶園の中で飲食店や雑貨店

経営などの本格的な起業においても、貸付金制度は活用されている。現在のところ、貸付金の回収率は一〇〇%である。

この他、奨励金は、家の改修工事費への貸付、コミュニティの社会的行事費、公共トイレ設置などに活用されている。

二〇〇六年度、マカイバリ茶園で行われたプロジェクト数は六十九、一九九四年のFLOへの加盟以来、約八百五十のプロジェクトが実施された。

このようなマカイバリ茶園におけるフェアトレードへの取り組みは、FLOからも高く評価され、二〇〇四年十一月にはFLOの傘下にあるMark Havelaar Franceより発刊された「FAIR TRADE—Revolution in a cup of tea」において、マカイバリ茶園特集が組まれ、茶園での取り組みが成功例として紹介された。

### 女性の経営参加

フェアトレードへの加盟と時を同じくして、バナジューは女性初の監督者を採用した。伝統的しきたりが残るインドの農村部で、女性が茶園の経営やコミュニティの経営に参加することは極めて珍しいことである。

女性初の監督者が誕生した当初、困惑したのは男性たちよりも、女性たちだったようだ。伝統的意識の残っていた茶園の女性たちが、女性の監督者の



女性初の監督者



フェアトレードの奨励金によって小学校が建てられた  
(写真提供: Jean-Luc Luysen)

下で働くことへ、少なからず違和感を示すこともあった。しかし監督者となった女性の献身的な働きに理解を示す女性たちが増え、現在では彼女を筆頭に五人の女性監督者が誕生し、製茶工場や、会計部門においても女性が生き生きと働いている姿に出会える。

**水汲みと薪集めから女性を解放**

女性の経営参加と同時にバナジーが力を注いでいったのが、女性が働く環境作りであった。

マカイバリ茶園の女性の多くは茶摘みに従事し、家庭に戻れば家事もこなさなければならず、重労働を強いられていた。

彼女たちを最も困らせていたのは、日々の水汲みと薪集めであった。女性と子どもは、毎朝川へ水汲みへ、森へ薪を集めに、何時間も費やした。

バナジーはバイオガスを導入した。バイオガスとは、牛糞と水からメタンガスを発生させるシステムで、料理用のガスに利用できる。バイオガスの導入は、女性たちを重労働から解放しただけでなく、煙が充満する台所からも解放したのであった。バイオガスに必要不可欠な牛を購入する際には、フェアトレードによる奨励金の貸付金制度を利用することができる。

水汲み対策として、バナジーは各集落に貯水タンクを提供した。雨水を巨大なタンクに貯蔵できることで、一年のほとんどを水汲みする必要がなくな

った。

女性たちを日々の重労働から解放した結果、女性たちは自分のための時間を持てるようになり、生活の質が向上した。

女性の経営参加は、女性の自立意識を高めるだけでなく、コミュニティの福祉充実へとつながった。

このように、マカイバリ茶園では植物、動物、コミュニティが最も良い状態で共存できるよう、最善のケアを提供している。このような先駆的な取り組みは、バナジー自身が自らの原点がマカイバリ茶園にあることを確信しているからであり、取り組みを通して茶園が発展していったのは、バナジーとコミュニティとの強い信頼感から生まれてきた賜物と言えよう。

紅茶に関わる人、動物、自然、それらすべてが関連し、調和を保ち、良い状態である時に、すばらしい紅茶が育つ。

バナジーの言葉どおり、一九九六年と二〇〇三年、マカイバリ茶園から出品された紅茶は、ティーオークションにおいて歴代世界最高値を記録したのである。

**消費者をも包摂した経営**

——ともに有意義な関係を目指して

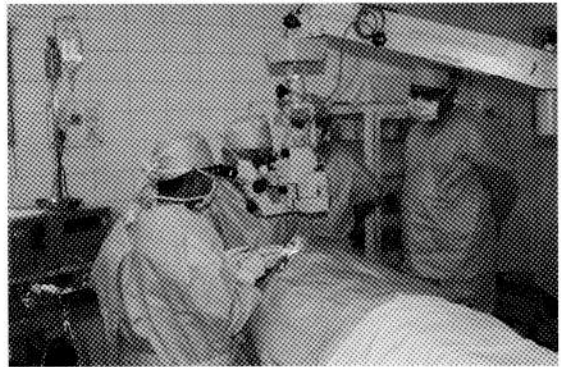
リジャパン(以下、マカイバリジャパン)は、マカイバリ茶園のアジア・日本総代理店としてスタートした、家族経営の企業である。

バナジーとの出会いは、インド人の友人を介してであった。九年にわたる二度のインド駐在を終え、商社を早期退職した石井吉浩は、インドでビジネスを始めようとしていた。一方、バナジーは日本市場を開拓しようと考えていたが、適任者が現れずにいた。

マカイバリ茶園がそうであるように、インドにおける企業は、家族経営が主流である。バナジーの下には日本の大手企業からの誘いが数多く来っていたが、バナジーは見向きもしなかった。

石井吉浩と話し合ううちに、バナジーはアジア・日本の総代理権を与えることを決意した。石井吉浩がインドでの経験が長いこと、そして何より茶園に感銘を受けていること、石井吉浩の妻・洋子は三十年以上にわたり自然食品を愛好し茶園が実践している農法に深い理解を示していること、経営コンサルタントの長女・道子、インドの教育開発学を大学院で研究している次女・博子もいずれ経営に参加するだろう、ということ、バナジーにとってこれ以上ない適任者だった。

インドでの生活を経験し、インドで新しいビジネスパートナーに恵まれたマカイバリジャパンにとって、インドへ恩返しをすることは自然な流れであ



ダージリン白内障キャンプ

った。インドで生活をしていると、様々な境遇の人に出会い、お互いに協力しあって生きていく風土を感じる。

素晴らしい紅茶を作ってくれるマカイバリ茶園の人へ、そしてマカイバリ茶園を育てくれたダージリンへ恩返しを。

マカイバリジャパンが開始した翌年、「生産者と消費者の顔が見え、お互いに心が通っている紅茶」をコンセプトに、懸け橋プロジェクトがスタートした。

#### ダージリン白内障キャンプ

懸け橋プロジェクトで最も大きなプロジェクトが、ダージリン白内障キャンプ（以下、白内障キャンプ）である。

二〇〇三年から始まり四回目を終えた白内障キャンプは、マカイバリ茶園の紅茶のファンでいらっしやる、埼玉医科大学眼科学教室主任教授・米谷新（よねや・しん）先生と、十四社の企業の方々による協力で始まった。

ダージリンでは未だに多くの人が白内障に苦しみ、たとえ手術を受けられたとしても、術後感染によって失明する人も少なくない。

「手術の機会に恵まれなかった人へマハラジャ（最高級）の手術を提供する」をコンセプトに始まった白内障キャンプの初年度は、手術用大型顕微鏡、インドの政府系病院では第一号となる手術用超音波装置をはじめ、包帯一つに至るまで、総重量一トンにもなる手術

に必要な資材を空輸で運び入れた。

白内障キャンプの舞台となった、インド政府のカーシオン国立病院では、米谷先生白らが執刀し、四回目を終えた時点で百二人の患者が無料で手術を受けた。

二〇〇五年には、日本の医薬品会社の招待で、カーシオン国立病院の現地ドクターが、東京で一週間の研修を受ける機会に恵まれた。

現地ドクターへの技術移転も視野にいたれた白内障キャンプは、今後も継続されていく。

#### エコツアー

消費者の方に、マカイバリ茶園の取り組みを最も理解してもらえるのは、現地に赴いてもらうことである。二〇〇四年から始まったエコツアーは、旅行会社と提携し、過去二度実施された。ツアー参加者は、茶園の取り組みや、実際に茶畑を歩くことで、マカイバリ茶園の農法や働いている人々に触れ合うことができ、参加者にとっても茶園の人々にとっても有意義な時間であった。

二〇〇六年からは茶園の中にエコハウスができ、参加者は茶園の中で宿泊することができた。エコハウスの運営はコミュニティによって行われ、宿泊費の一部は彼らの収入となる。

#### ホームステイプロジェクト

茶園での生活を体験したい人に、コミュニティの家でのホームステイ・

プロジェクトも行っている。宿泊費は、ホストファミリーの収入となる。

長期滞在を希望する人には、茶園から宿題が出される。その人が茶園で豊かな時間を過ごすお返しに、茶園に何かを還元しなければならぬ。

マカイバリ茶園には、毎年ヨーロッパから多くの若者が訪れる。茶園が受け入れるのは、専門分野を持ち、茶園に何かを還元できる者に限る。過去の例では、茶園に生息するすべての野草を採取し、調べ、標本にした人。茶園の子どもたちに英語を通して学ぶことの楽しさを教えた人。茶園に落ちていたゴミ問題に気づき、子どもと共にゴミ拾いプロジェクトを始めた人など、若者ながら様々に工夫し、茶園に還元をしている。

「自分探し」で訪れる一方的な関係ではなく、滞在者も茶園の人も、共に有意義な関係でなければならぬ。厳しいうちに思われるかもしれないが、双方の成長のためにも必要なことだと、バナジューは考えている。

このように、消費者が生産者と関わり合い、お互いに理解を深め、共に成長しあうことは、物理的に離れている消費者、そしてその懸け橋の役目をするマカイバリジャパンも、マカイバリ茶園におけるホリスティックな要素の一つなのである。

植物、動物、人間が共存・共生する





英国人青年と一緒に英語を学ぶ子どもたち

マカイバリ茶園内の取り組みだけに留まらず、茶園に関わる人々が繋がり、お互いに影響しあい、そしてそれをまた茶園に還元する。そのことこそが、バナジーが理想とするホリスティックな視点に立った持続可能な茶園経営なのである。

### おわりに

#### 茶園主バナジーの夢

このようなバナジーの取り組みは他のダージリンの茶園にも広がりを見せつつある。二〇〇六年、バナジーはインドNGOと協力して、ダージリンの百二十六人の農民に、茶園の取り組みを紹介した。二〇〇七年にはアッサムの農民にも同様の活動をする予定である。

マカイバリ茶園の実践は、今や世界からも注目され、紅茶業界のみならず、国際機関をはじめNGOや環境団体からも毎年視察団が訪れている。

二〇〇二年、バナジーはインド政府から、素晴らしい個人的業績と国家に対する顕著な奉仕をした者に与えられるラシュトリア・ラタン（国の宝石）勲章を授与された。

バナジーが三十年前に取り組み始めた頃は見向きもされなかった活動が、時を経て多くの人に理解され、評価されるまでに至った。

バナジーの夢は、持続可能な視点に立った農業をインド全体に広めること

である。インドの人口の約六〇%を占める農民が、持続可能な視点に立った農業を実践すれば、インドが抱えている貧困をも克服できると彼は信じている。

### 【参考文献】

- Banerjee R. *The Wonder of Darjeeling*. Kolkata: NETTREK, 2003.
- Bhandari L. and Kale S. *Indian States at a Glance 2006-07: West Bengal—Performance, Facts and Figures*. New Delhi: Dorling Kindersley (India), 2007.
- GAMMA. *Fair Trade—Revolution in a cup of tea*. Vanves: GAMMA, 2004.
- Malley, L.S.S. *Bengal District Gazetteers*. New Delhi: LOGOS PRESS, 1999.
- Lohia. A.K. 『ダージリンンティー—優雅・最高級』 Calcutta: Darjeeling Planters Association, 1988.

### 【関連ウェブサイト】

- Tea Board of India  
<http://www.indiateaportal.com/>
- Greater Nepal—ネパール系インド人と社会運動、関口真理  
<http://homepage3.nifty.com/~marianne/mar-nep3.htm/>
- フェアトレード・ラトル・ジャパン  
<http://www.fairtrade-jp.org/>
- ダージリンマカイバリ茶園  
<http://www.makabari.com/>
- 有限会社マカイバリジャパン  
<http://www.makabari.co.jp/>

(5212 2007)

至るまで、総重量一トンにもなる手術

ミニティーの家でのホームステイ・

植物、動物、人間が共存・共生する